

私のひとりごと

石坂洋次郎

私のひとりごと  
石坂洋次郎

私のひとりごと

昭和44年6月12日 第1刷発行

昭和44年7月16日 第2刷発行

石坂洋次郎 \* 著者

野間省一 \* 発行者

株式会社講談社 \* 発行所

東京都文京区音羽 2-12-21

電話東京(942)1111(大代表)

郵便番号112 振替東京3930

豊国印刷株式会社 \* 印刷所

黒柳製本株式会社 \* 製本所

定価680 円

乱丁本、落丁本はおとりかえいたします。

© Yojiro Ishizaka 1969 Printed in Japan



私のひとりごと  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
目次

|              |    |
|--------------|----|
| 文化人と私生活      | 9  |
| 年齢のことなど      | 16 |
| 政治を語る        | 23 |
| 講演ぎらい        | 30 |
| 「海軍主計大尉小泉信吉」 | 37 |
| 菊池寛賞をいただく    | 44 |
| 人間の記憶について    | 50 |
| 架空の一週間       | 57 |

三木清君のこと  
65

月夜の訪問者  
71

食べ物の話  
79

高額所得者の弁  
86

ウェーレンライトの「捕虜日記」を読む  
93

所感二つ  
104

わが血統  
111

オチのある話―小さな歴史の流れ―  
118

わがふるさは山のかなたに

125

病氣・そのほか

132

若い女性をほめたたえる

139

感覚と思考

146

「スベトラーナ回想録」を読む

155

卒業式の祝辞

163

日本人は水っぽい

171

夕明りの中にいて

180

むだな骨折り

187

あのこと・このこと

194

孤独な亀サン

201

五十年経ったら

209

カミユの「異邦人」を読み、観る

217

学生二題

225

歳末多忙

235

あとがき

245

装幀 \* 上口睦人

私のひとりごと



## 文化人と私生活

今日の文学者の生活は、戦前の文学者達の生活に較べると、一般の勤人並みに常識化されて来ているということが云えそうだ。例えば、男性の文学者の場合、女性関係なども適当に処理して、そのために家庭生活を破壊させる処までは至らない。お金もほどほどに使って要領よく生活するコツを身につけている。

だが、そのために、私生活のすべてを文学に投入したころの文学者の作品に較べて、作品の質が低俗化しているかという点、必ずしもそうとはやはり考えられない。一見、常識的な生活の中からもいい作品は生み出されていると思う。

夏目漱石は近代の日本を代表するすぐれた文学者であるが、肉親の人々の描いた家庭人としての漱石は、よき夫、よき父というにはほど遠い、異常な神経の持主であつたらしい。森鷗外には特権階級の意識が強かつたらしいし、幸田露伴の一徹な文人気質も、家庭に平和な空気を齎す家長だつたとは思われない。永井荷風にいたっては、晩年、実社会からまったく疎外した

世界で生きていた。

早い話がソクラテスや孔子や本居宣長等が酒に飲んだくれて女遊びにふけっている人間でも、彼等の思想には高い値うちがあるものだろうか。

もっと若い文学者で、いわゆる破滅型の生活に終始した人に太宰治がある。いつか何かの雑誌で、太宰の未亡人が「私は夫を尊敬しています」と云っているのを読んで、喉に物がつかえるような氣持にさせられた覚えがある。人間同士、ことに夫婦同士のいざこざは、一方が死んで時が経てば、あの悲しみもこの恨みも、恩讐のかなたに消え去ってしまうものらしいが、しかし太宰のような生き方、死に方（よその女と心中）をした夫の場合、未亡人の立場で「私は夫を尊敬しています」という氣持がほんとにわくものであろうか。どうも賢夫人の政治的な發言のような匂いがしてならない。（こういう云い方は未亡人に対してまったく礼を失したことになるのだが――）

同じ津軽出身の破滅型作家・葛西善蔵の場合、いまは亡くなった勤人の長男が、世間にはうちのオヤジほど滅茶苦茶な人間はいないと友人に訴えていたそうだが、私にはその訴えの方に、裏返しにされた父親への愛情が感じられるようで、ついホロリとさせられる。殊に私は、葛西善蔵のひところの私生活を知っているので、ああいう無茶な生活は、芸術、政治、宗教、その他どんな対象をもち出して来ても、肯定されるべき筋合いのものではないと思っている。

老人になりかけたいまの私の心境で云えば、葛西善蔵は、わずかばかりの小説を書き残すよ

りも、平凡な家庭の主人として妻子に親しまれる一生を送った方が、大きな意味では社会的により有意義だったような気がしてならないのだ。肉親や周辺の者を不幸にする生活環境の中から、人生にプラスする芸術がほんとに生み出されるもののだろうか。太宰と葛西の話が出たついでに言えば、大地主の家に生れた太宰は生きる意志が弱く、たびたび自殺をこころみているが、同じ破滅型と言っても、貧農の気質を背負った葛西は、最後まで生命に執着して一生を終った。

私はドストエフスキーの作品には心をうたれる。しかし、彼の作品を生み出すための下積みにされる彼の肉親では絶対にありたくない。エドガア・アラン・ポウ。モウパッサン。その他、作品には牽かれるが私生活に捲きこまれるのはまっぴらだと思わせられる作家は内外に少くない。私生活は消えて芸術だけは永久に後世に残るとしてもだ。

私は大学予科のころ、石川戯庵という人の訳で、ジャン・ジャック・ルソーの「懺悔録」を読んだ。それが書かれたころのフランスやヨーロッパの事情にうといせいか、あまり面白いとは思わなかった。懺悔録と題するからには、表向きの論説文とは別に、一私人としての反省や回想を記したものでらうと予想していたのに、自分の表向の私生活や著書の解説や宣伝めいたものが多く記されていたからである。

それが三四年前、井上究一郎氏の新訳で、「告白録」（そう訳されていた）を再読する機会に恵まれたが、幸か不幸か、私は巻末の解説や年譜をさきに読み、ルソーが一時期、白痴美の一

未亡人の家に客分として滞在中、その家の支配人と自分が、ともに未亡人の愛人としておだやかな三角関係の生活を営んでいたこと。後年、無知で素朴で純情な若い女中と、結婚しない約束で肉体関係を結び、つぎつぎに生れた五人の子供等を全部カトリック系の孤児院に入れてしまい、ルソー研究者達の熱心な調査によっても彼等の消息は今日に至るまで不明であることなど知って、云い知れない不快なショックにうたれた。

そして「告白録」はそんな事に関する懺悔や反省などの記録で埋められているのであらうと、期待して読み直したのであるが、残念ながら「告白録」は自分の思想や著書や、それらのために迫害された次第をやや誇大に記録しているだけで、五人の不幸な私生児の扱い方については、

「無知な女中と意地わるなその母親に育てられるよりも、孤児院に入れた方が子供等のために仕合せだと思つてやつた」と簡単に云つてのけて、その件の「懺悔」をすませているのだ。私は啞然とさせられた。ルソーの大バカヤロウ！と思った。女中の無知やその母親の意地わるに責めを負わせて、五人の子供等の父親である自分の責任はどんな形で背負っていたのであるか。

いつかフランス文学者の河盛好蔵氏と対談した時に、その問題について尋ねると、ロマン・ローランが、女中に生ませた五人の子供をつぎつぎと孤児院に入れたルソーの背徳行為をきびしく非難してゐるうんぬんと教えて下さった。「しかし——」と河盛氏は結論として云った。

「我れ我れとしてはやはり残された彼の著書を問題とすべきではないでしょうか」

そこらの所が微妙な問題で、私などにはよく分らない。ともかく私自身は、ルソーのそういう略歴を知ってから「エミール」「孤独な散歩者の夢想」そのほかの嘗て読んだ彼の著書が、急に色あせたものに感じられたことは事実である。文学者の場合は、自分の私生活を破壊して、その情熱を作品に注ぎこむということも考えられるが、哲学者や思想家の場合は、特に言行一致ということが大切な条件となるのではないだろうか。そういう点で、フランス革命の原動力の一つとなったと云われるルソーのヒューマニスティックな思想と私生活の間には、どうにも納得しきれない大きな断層があるように思われてならぬ。彼の説く所は、盛り場のたたき売りの口上のように、よほど割引きしてきかなければならないのではないか——そう思った。

もっとも私のみみっちい愚痴などはあぶくのようなもので、ルソーは偉大な思想家として、後世まで世界文化史の上に輝やかしい名をとどめるのであろう。だが、ソクラテス、孔子、聖徳太子、エマースン、いや問題をもっと身近にして、西田幾多郎、倉田百三、津田左右吉、阿部次郎——こういう人々の私生活に、ルソーの場合のような冷たく計算されたスキヤンダルがあるとするれば、私共は彼等の思想に共鳴することが出来るであらうか。答は「ノウー」である。それがルソーだと……。どうもそこらの所が私にはハッキリしないのである。

私はこの文章を、青年の偏執的な情熱に駆られて「文学・イズ・オールマイティー」という考えに走りがちな若い人々の頭を、いくらか冷静にさせたい目的で書き出したのであるが、考

えてみると、文学とかぎらず、ひろく文化というものには、どうしようもない限界が存するよううに思えてならない。カント、ヘーゲル、マルクスの思想に通じ、ゲーテ、シルレル、トーマス・マンの文学に親しみ、ベートウヴェン、シューマン、シューベルトの音楽に感動させられたドイツ民族が、精神病者に近いと云われるアドルフ・ヒットラーの命令一下、世界大戦を起し、ユダヤ人を大量に虐殺するといった底の暴挙を敢てしているのである。自国の偉大なる先輩達の残した文化の影響も、それを押しとどめる、草一本ほどの力もなかったわけである。

いや、そう云えば、カトリックとプロテスタントの別はあっても、同じキリスト教を国教とするヨーロッパの各国は、しょっちゅう戦争と仲直りをくり返して、彼等の国々の歴史を綴つて来たようなものだ。いったいキリストに対する信仰が、彼等の心身のどこらへんまで浸透しているものなのかと疑いたくなる。もつとも、一時期の暴風雨のような戦争がやめば、信仰も哲学も芸術も、人々の心にまたみずみずしい芽を吹き出して来ることも、素直に受けとつていい事実である。——結論として、人間とは不完全な生き物であるということになるのであろうか。

現代の日本の国民にいちばん長くひろく読まれている作家は夏目漱石であるというが、私はそのよつて来たる理由の一つとして、彼の作品が常識的な市民生活の中から生れたものであるせいだと思つてゐる。先きにも述べたが、彼の肉親の記した回想記によると、漱石は氣むずかしく神経質で、必ずしもよき夫、よき父ではなかつたらしいが、しかし中学校や高等学校や大